
ファントム・ブレイカーズ

李音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファントム・ブレイカーズ

【Nコード】

N9981W

【作者名】

李音

【あらすじ】

16歳の天然ボケ少女、天野神那々（あまのがみなな）は、超絶的な霊力を持ちながら、霊術の才能がまっただなかつた。妖命社という悪霊妖怪退治を専門に行う会社の社長、二葉杷月ふたはつきは、那々をその霊力の高さから一流の霊能力者と思い込み、高い時給を条件にスカウトする。それが大間違いであった事に早々に気付かされた杷月は、自分からスカウトした手前、首にするわけにもいかず、悩んだ末に、とりあえず那々を先輩社員に付けて、悪霊退治を体験してもらう事にした。那々は、タロット使いのマリエット・シースや、同

じ学校に通う対霊武具のエキスパート、五樹霞^{いつきかすみ}に引っ張られ、否応なしの対霊戦に巻き込まれていく。

（甘辛小説ギルドガイアにも掲載）

登場人物紹介（前書き）

ホラーコメディなので、非常に残酷な描写もあります。苦手な方は注意して下さい。

この小説は今から20年以上前にある少年誌で連載していた漫画の設定を踏襲しています。二次創作ではないので、ストーリーやキャラ名はまったく違います。何でこんなことをわざわざ書くのかと言うと、その漫画が今でも本当に好きだからです。当時は何度も雑誌でその漫画だけを読み返したものです。

こんな事を書く、パクリ小説か？と思われるでしょうが、そこは微妙なところです。その漫画は様々なキャラがいて、設定がしっかりしていたのですが、主人公以外のキャラが出る前に10話ほどで打ち切りになってしまったという経緯があるからです。よって主人公以外のキャラは、きつとこうだろうなと想像する事しか出来ません。それが非常にもどかしいところで、あのキャラが出てきたらどんな話になったのかと想像したりして、悶々としたものが未だに残っています。詰まるところ、そういったものを払拭する為に、この小説を書こうと思ったわけです。完全なる自己満足小説です。もし別の少年誌で掲載していたのなら、史上最初の萌え漫画の地位を築く事が出来たかもしれない作品です。本当に残念な事です。

もしこの作品の元ネタが分かる方がいたら、是非とも教えて頂きたい。そんな貴方はもはや心の友と言えます。恐らく本当に好きな人なら、登場人物のキャラ名を見ただけで分かると思います。

登場人物紹介

天野神 那々（あまのがみなな）

巫女見習いの少女で、霊力だけは異常に高く、霊能力者からすると、彼女はどこにいても分かるので非常に目立つ。見た目は長い黒髪の日本人形を思わせる清楚感のある少女で、性格は明るく和やかである。その反面、天然ボケが激しく、生まれた頃から見えていた魑魅魍魎を、この世の住人だと思い込んでいた事は、妖命社の社員一同を絶句させた。

二葉 杷月（ふたばはづき）

妖命社の社長で、経営面を一手に担っている。眼鏡をかけ、長い黒髪の知的美人で、22才の若さで会社を経営する。仕事の段取りからクレーム対応まで彼女一人で引き受けているので、ほとんど外に出ることはないが、一流の霊能力者である。召喚や降霊術を得意とし、子供の頃に瀕死の子狐を助けたことから、強力な稲荷の加護を受けていて、多種多様の飯綱を使ったり、九尾の狐を召喚して戦わせる事まで出来る。余程危険な仕事でない限り、彼女が除霊に向く事はない。

五樹 霞（いつきかすみ）

那々と同じ高校に通っていて、二年生の先輩である。那々の存在に最初に気付いたのは彼女で、それを杷月に言ったことが事の起り。

赤みのある髪をツインテールにした強気で快活な少女で、あらゆる対心霊武具を使いこなす。しかもその心霊武具はほとんどがお手製で、自分で普通の武器を改造して対霊用にしている。武器を持つと性格が凶暴になり、さらに暴走すると所構わず重火器をぶっ放すという困った少女で、それが杷月の悩みの一つにもなっている。だ

が、霊能力者としての实力は高い。

マリエット・シース

フランス人の少女で、年は那々と同じ16歳。小柄でショートの新髪に緑の瞳をした非常に可愛らしい容姿で、那々はお人形さんみたいと言っている。

タロットカードに眠る力を発言させる能力があり、使用するタロットの種類により力は異なる。魑魅魍魎の退治はもちろん、罨を仕掛けたり、結界を張ったり、仲間の支援を行ったりと、オールマイティーな霊能力少女である。性格は大人しく無口だが、たまに口を開いては鋭い突込みを入れたりする。

クーちゃん

いつもマリエットの頭の上に止まっている霊能力インコ。悪霊妖怪の類の位置を正確に把握でき、それを喋って教えてくれる。現場では高性能の対霊リーダーとして活躍するが、危険が迫ると主人を置いてさっさと逃げてしまう。リーダーにしなければならないから戦いは役に立たないが、忠誠心はあまり高くないようだ。

無口なマリエットの代わりによく喋り、杷月の腹黒さをばらして激怒させたり、霞にいらん突込みを入れて怒鳴られたり、鳩時計の真似をして那々を焦らせたりと、ある意味存在感がある

四鬼蓉子（しきようこ）

生まれた時からその身に鬼神を宿す四鬼家の娘。ファントム・アサシンの異名を持ち、死霊を自由に操ってターゲットを暗殺する。18歳の少女で、黒髪のショートボブに可愛い顔立ちをして、少年のような口調で話す。絶対の自信に加え、女子高生とは思えない冷酷さを持ち合わせている。死霊を操る他に、その身に宿る鬼神の力を得る事が出来る。その破壊力も凄まじいが、それ以上に超越した素早さを持つ。鬼神疾走により足で時速100キロで走行して

いる車にも軽く追いつき、ごく短い距離なら音速で移動する事も出来る。

第一話 那々来(きた)る！

天野神那々(あまのがみなな)は巫女見習いをしている以外は、何の変哲もない少女だった。容姿は端麗で、長い黒髪にカチューシヤを付けて、整った顔立ちの中に大きな黒い瞳が輝き、日本人形さながらといった雰囲気をもっていた。正確は明るく和やかで、男子生徒からは人気がある。ただ、彼女にはそれらを払拭してしまうほどの大きな欠点があった。

その日、学校帰りにスカウトされた那々は、そのまま二葉^{ふたははづき}杷月の会社の事務所まで連れていかれた。

杷月は眼鏡をかけた知的美人で、長い黒髪を背中に流し、眼鏡の奥にある深みのある緑の瞳はグリーンガーネットのように美しく輝いていた。全体的にはOL風のスーツ姿で、白のTシャツの上に深みのある緑の上着、タイトなスカートも上着と同じ色で揃えていた。見た目通りの知性を持ち、二十二歳の若さで会社を経営している。

会社の事務所はマンションの一室を使っていて、入り口の扉には大きく『妖命社^{ようめいしゃ}』と書いてあった。

「さつきも説明したけど、うちは悪霊妖怪の類を専門に退治する会社よ。他の子たちも来てると思うから、紹介するわね」

「はい！」

元気よく返事をする那々だが、何で自分がここに連れて来られたのか、よく分かっていなかった。時給1500円のバイトという話に釣られて来ただけと言って良い。

事務所の中に入ると、まず那々の目についたのが、パソコンの液晶画面に向かっていたブロンドショートカットの小柄な少女だった。その頭の上には鮮やかな緑のインコが乗っていて、可愛らしく囀^{なぐさ}っていた。これが那々の心をがっちり捉えた。

「可愛い！？ これはまずいですよ！ 反則的な可愛さです！ 頭

の上のインコがにくいですね！」

金髪少女が騒がしい那々の方を見た。顔立ちだけではなく服装も可愛らしく、若草色の短めなシルクのスカートに、同じ色の半そでのワンピースを着ていて、どことなく気品が漂う。彼女のペリドットグリーンの大きな瞳できょとんと見る様が、那々を更にときめかせた。

「お人形さんみたいな女の子だ、超可愛いつー!!」

「ちよつとあなた、大丈夫？」

柀月は那々があつちの方の人かと心配になって言う。

「すみません、あんまり可愛いんで、びっくりしちゃいました」

那々は少女に近づいて手を差し出す。

「天野神那々と言います。今日からこの会社で働く事になりました。よろしく願いますね」

少女は那々と握手はしたものの、ずっと黙っていた。

「……」

「あの〜」

『マリエット・シースだ。よろしくな!』

と言ったのは少女の頭の上に止まるインコだった。那々はいきなりインコが喋ったので目を丸くした。

「この鳥さんはマリエット・シースって言ってますか、立派な名前ですね」

「違う違う、マリエットは飼い主の方よ。こら、マリエット、無口にも程があるわよ、ちゃんと自己紹介しなさい」

「…はい」

マリエットは頭のインコを手で包み込んで那々に見せると言った。

「クーちゃんです」

「あべこべになってるわよ！ 分かり辛いでしょ！」

柀月がいらついても、マリエットは気にする様子もなく言った。

「わたしがマリエット・シースです。よろしく願います」

「天野神さんと同じ年だから、仲良くしてあげてね」

ようやく一人目の自己紹介が終わった。この事務所にはもう一人少女がいた。

「おお、早々にスカウトしてきたね」

事務所の奥の椅子に座っている朱色の髪をツインテールした活発そうな少女が言う。彼女は那々とまったく同じセーラー服を着ているが、スカーフの色とスカートの長さが違っていた。那々はスカートの長めでスカーフは黒だが、ツインテール少女のスカートはミニで、スカーフの色はオレンジだ。彼女の前の机には、大小の銃ともしきものが置いてあり、手にもそれらしいものを持って磨いていた。『わたしは五樹霞^{いっきがすみ}、よろしくね。あなたと同じ学校に通っているわ、一学年上よ』

「先輩さんなんですネ！ 那々です、よろしく願いします！」

那々は頭を下げた後、霞が持っているものをまじまじと見つめて言った。

「エアガンですか？ サバイバルゲームが趣味なんですか？」

「いや、これはエアガンじゃなくて、対霊用の銃だよ」

「たいれい？」

さらに那々は考える。やがて彼女は難問を解いたように表情を輝かせた。

「わかった！ 仁侠映画のファンなんですネ！ 銃を磨くと同時に、男気も磨くという！」

「何でこの美少女が男気なんか磨くのよ！？ それに、たった今対霊用の銃だって言ったじゃないの！」

「あれ、違うんですか？」

「違うに決まってるでしょーっ！」

「まあ、おふざけはそれくらいにして……」

柊月が苦笑いして言う。何だか雲行きが怪しくなってきた。

「ともあれ、これだれの霊力を持っている子には初めて出会ったわ」「学校のどこにいても、あんたの居場所が正確に分かるくらいだもんね。相当なもんだよ、これは」

「へ」

杷月と霞の話に、那々は微妙な反応をする。二人共何だか嫌な予感がしてくる。

「へって、あんたの事だよ」

「そうだったんですか？ わたしって、霊力っていうのがそんなに凄いですか？」

これを聞いた杷月と霞の衝撃は筆舌に尽くしがたいものがあつた。二人共おもわず暫し黙ってしまった。

「…それだけ神がかった霊力を持つてて今まで気付いてないって、有り得ないでしょ！！？」

「天野神さん、あんまりふざけてはいけないわ」

那々はまったく分かってないという顔をしていた。それで二人は確信した。

「ちよつと、まじだよこの子！」

「…ま、まあ、除霊出来れば何の問題もないわ。天野神さんはどんな術が得意なの？」

「えつと、お祈りが出来ます！」

「祈祷ね。これだけの霊力を持つていれば、型通りの祈祷だけでもかなり効果があるはずよ。まずは一仕事やつてもらいましょう」

杷月がパソコンに向かってなにやらやっている間、那々はマリエットと一緒に紅茶を飲んでいた。

「この紅茶美味しいです！」

「初摘みアールグレイ」

「マリーちゃんは紅茶が好きなの？」

『好きだ！』

インコのクーちゃんが那々に向かって言った。その後も那々はクーちゃんにクッキーを食べさせたりして、楽しい時を過ごす。

「占いしてあげる」

「占い？」

「出たな、マリーの一発必中タロット占い。これは結構怖いんだよ」

霞が言つと、那々は首を傾げた。

「まあ、マリーが自分から占いするって事は、あんたの事が気に入ったんだよ」

マリエットはタロットカードを出すと、シャッフルして一番上のカードをめくって那々に見せる。

「…なんか、怖いですよ、そのカード」

「うあ、デビルかよ…」

「今日一日、貴方はろくなことがないでしょう」

『ご愁傷様!』

「うっ」

マリエットとクーちゃんの連続コンボに那々は怯むが、すぐに開き直った。

「わたし、悪い占いは信じない事にしてるんです!」

「ところがどっこい、マリーの占いは必中だから逃れられないんだな」

「変な冗談は止めて下さい」

「冗談じゃないよ! わたしだって何度も経験してるんだからね!」

「うっ、そんな、お近づきの占いがデビルって……」

「マリーを恨んじやだめだよ。あんたの運が悪いだけなんだから」

「はうっ…」

そんな会話をしているうちに、杷月が書類をまとめて言った。

「さ、天野神さん。この住所のところまでいって除霊してきて。結構強力な怨霊だけど、一人で大丈夫かしら?」

「はい、任せて下さい!」

「なら、除霊が終わったら、この書類に雇い主のサインをもらうのよ」

「はい、了解です!」

那々は入り口のところで一旦振り向くと、額に手を当てて敬礼してから出て行った。

「…あの子、大丈夫なのか?」

「幾らなんでも、あれだけの霊力をもっているんだから、除霊の—
つくりは出来るでしょう」

「そうかな？」

会話には滅多に口を挟まないマリエツトが言うので、杞月はとても心配になってきた。

那々は一旦家に帰って紅い行燈袴と白衣に着替えてから目的地に向かった。那々が目的の家に着くとすぐに、雇い主が泣きついてきた。白いＴシャツを着た若い男性で、その怯えようは普通ではない。「もう次々と変なことばかり起るんです。お願いですから、早く何とかして下さい！」

那々が案内されて居間に入ると、物が散乱していた。筆筥が傾いていたり、テレビが床に落ちていたり、かなり大きなものまで動かされた形跡があつた。

「あれ？ この辺りだけ大地震が起つたのかな？」

「そうじゃありません！ 勝手に物が動くんです！」

「物が勝手に！？ もしかして、超能力ですか！？」

「ち、違いますよ、貴方は何を言ってるんですか！！？」

「先祖代々超能力を有する家系なのかと思いました」

——なんだこの子は、大丈夫なのか…？

雇い主の心配を他所に、那々は少し開いているドアの向こうをじつと見つめだした。

「あの、何か見えるんですか？」

「ここには頭が二つある変質者が住んでいるんですね」

「住んでませんよそんな人！！？ 早く除霊というのをやって下さい！！！」

「わかりました！」

那々は大幣おおめさを振り回して祈り始めた。何だかよく分からないことを呟いているが、雇い主には適当な事を言っているようにしか見えない。

「はーっ!!」

「おおお!？」

あらゆるものを払拭するかと思うような那々の気合が居間の隅々まで響く。

「はい、終わりました」

「それで、幽霊はどうなりました？」

「金運の上るお祈りをしておきました」

「はい？」

「では、これにサインをお願いします！」

有無を言わず那々が書類を出すので、雇い主は勢いに押されて名前を書いてしまった。

「ありがとうございました！」

那々は頭を深く下げてから家を出て行った。雇い主はあっけに取られて何も言えなかった。

那々が巫女の姿のまま事務所に戻ると、杷月が電話応対をしていて、霞とマリエットは近くでそれを聞いていた。何だか妙な空気が流れているが、那々は気にもせずに事務所に入ってきた。

「本当に申し訳ありません。すぐに代わりの者を向かわせますので、杷月がそう言って電話を切ると、那々は澁刺として言った。

「ただいま帰りました」

「那々っ!!!!」

いきなり呼び捨てで怒鳴る杷月に、那々は体をびくつかせる。

「今クレームが来たわよ！ ポルターガイストがまた始まったって！」

「ポルターガイスト!? わたし、変質者が沢山出てくる映画は嫌いです！」

「違う!! 除霊出来てないって言ってるの！」

「で、でもちゃんとお祈りしましたよ。書類だってほら、サインしてもらいました。お仕事は完璧に完了しています」

「除霊できてなかったら完璧な失敗よ！　その上契約書にサインまで書かせたら、うちが詐欺罪で訴えられるじゃない！」

「那々さんは、除霊の意味が分かっているんじゃないですか？」

マリエツトが言っていると、杷月の顔が青ざめる。

「まさか…」

「那々、除霊って何？」

霞が聞くと、那々は自信満々に答えた。

「お祈りする事ですよね！」

「じゃあ、そのお祈りって何なの？」

「それは、金運を上げたり合格祈願をしたり、わたし神社でよくやってるんです！」

「おいおい、本当に分かってないよ……」

杷月は眩暈めまいがして近くの椅子に座り込む。

「そんな馬鹿な…それだけの霊力を持っていたら、悪霊の類に必ず狙われるはずよ。最低でも身を守るだけの対霊術が身につくものだけ……」

「杷月さんの言うとおりだ。この子はいったい何なんだ？」

「那々さん、幽霊って見えますか？」

マリエツトが聞くと、那々は首を振った。

「幽霊は一度も見た事ありませんよ」

「嘘だ！　それだけ霊力が高ければ、絶対に見えてるはずだよ！」

「わたしもそう思います」

マリエツトは霞に同意した後、床を指差した。

「那々さん、あそこで横になっているおじさんは見えますか？」

マリエツトの指差した方に、小太りでシャツ一枚パンツ一丁の青白い顔をした親父が、口から血を流して倒れていた。親父はだらしない笑みを浮かべつつマリエツトの事を見つめていた。

「その変質者は、さつきからそこにいましたよ。一緒に住んでるんじゃないんですか？」

「あるかつ！！　この乙女空間に、何であんな気味の悪い親父が住

「んでのよ！ 少しはおかしいと思いなさいよ！」

「さつきから那々さんは、幽霊を変質者と言っていますね」

「そう言えばそうね。何で変質者なの？」

杷月が聞くと、那々は生き生きとして言った。

「小さい頃に、変質者に襲われました。全身血みどろで、お腹が裂けて内臓なんかも出ちゃったりして、それが地面を張ってわたしの足を掴んできたんです！ それはもう恐ろしくって、どうしようかと思いました。でも、お母さんが追い払ってくれて、あれは変質者だから目を合わせちゃいけませんって言ったんです。だからそのおじさんも変質者です」

『な、なにーっ！！？』

杷月と霞が同時に驚愕した。

「今の今までお母さんの言ったことを信じきっていたと言うの……」

「そんな馬鹿な！？ 普通はどっかで幽霊だって気付くでしょ！！」

「教育の力はすごいですね」

『間違ってるだろ！』

一人冷なマリエツトに、インコのクーちゃんが突っ込んでいた。

那々の母親が変質者と言ったのは、まだ幼い娘を怖がらせないようにとの配慮に違いないが、那々は今までそれを信じていたのだ。

「…その後も何度も悪霊に襲われたでしょう」

那々は杷月に大きく頷く。

「その後も首がなかったり、血だらけだったり、ものすごい怖い顔していたり、色んな変質者が襲い掛かってきましたけど、その度にお母さんが守ってくれて、変質者を殴ったり踏んだり蹴ったり、それはもう、わたしがもう止めてと叫ぶくらい酷い目に合わせていました」

「悪霊の方が可愛そうだな…」

苦笑いしながら霞が漏らす。那々は更に言った。

「でも、中学生くらいになると、変質者は襲ってこなくなりました。あ、でも、たまに夜の公園を歩いていると、襲ってくる人がいまし

た。必死に逃げましたよ！」

「それは本物の変質者だ！！」

霞が声を上げて、那々には何だかよく分からない。彼女にとっては幽霊も変質者も同じものなのだ。

「信じられない、神懸った天然ボケだよ……」

「……そんな人たちが見えて、那々は怖くなかったの？」

「最初は怖かったですけど、すぐに慣れました」

と那々は事も無げに杷月に答える。

「それに、元々この世界に住んでいる人たちを怖がるのもおかしいですよ！」

その言葉に妖命社社員一同は絶句した。つまり那々は、物心ついた頃から幽霊が見えていたので、幽霊が見える世界が当たり前になっていたのだ。幽霊も人間と同様に、この世の住人と思い込んでいたのである。それは幽霊を変質者と呼んでいた事に如実に現れている。首がなかったり、血だらけだったりする人間なんているか、という突っ込みを忘却するほどに、杷月たちの衝撃は大きかった。クーちゃんのとけない囁きだけが、しばらく社内に響いていた。

那々来る！・・・終わり

第二話 タロットマスター 1

杞月と霞は、那々の神級天然ボケにしばらく茫然としていたが、いきなり喧嘩を始めた。

「どうなってるのよ、霞！」

「どうなってるって言われてもさ……」

「学校に凄い子がいるって大騒ぎしたのは、あなたでしょう！」

「確かにそうは言っただけさ、何も調べないでスカウトした杞月さんが悪いんじゃないか！」

「あなたがスカウトしろって言ったんじゃないの！」

「わたし知らない！ わたしは悪くないもん！」

「……どっちもどっち」

マリエットの一言で、二人共うつと黙った。

「……とりあえず、その悪霊を除霊しなさい、マリエット」

「はい」

マリエットが、さつきから床に寝転がって少女達を舐めるように見ている親父の幽霊に近づき、タロットカードを一枚出して、それを親父の目の前にかざした。カードの絵柄から白い光が漏れて親父を照らす。

「ギヤアアーーーーッ……！」

光に照らされた途端に、親父は陸に上った魚のようにのたうちまわり、さらにクーちゃんが飛んできて、顔や頭を突いて追加攻撃を行う。

「ここに入ってくるとは、阿呆な浮遊霊だ」

「最後に美少女達が見られて大満足しているに違いないわ」

杞月は消え行く者を見ながら言った。やがて親父の霊は完全に消滅する。

「ああ！？ 変質者が消えた！？」

「だから、幽霊だつて言つてるでしょ！」

霞がすかさず突っ込むと、那々はまだ分かっていないような顔をしている。杞月は頭が痛かった。

「この子、どうしましょう……」

「自分からスカウトしておいて、今すぐ首つて訳にはいかないわよね」

「流石にそれは酷すぎるわね……」

「杞月さんなら平気でやると思ったけどね」

「あなたを今すぐ首にしてあげましょうか？」

杞月が眼鏡を光らせて言うと、霞は、「すいませんでした」と頭を下げた。

「ものは考えようよ。これだけ高い霊力を持っているのだから、何か一つでも霊術を覚えさせれば、こつちのものよ」

「とりあえず、幽霊と変質者の違いを教えた方がいいと思います」

マリエットが言うと、杞月は肩を落とした。

「まずはそこから……」

その時、事務所の鳩時計が鳴き始める。杞月がはっとして見ると、もう夜の七時になっていた。

「あ、まずい！？ 依頼の事忘れてた！？」

「除霊失敗した上に忘れるとか、こりや無償ものだね」

「流石にお金取るわ、割引はするけど」

杞月は手早く新しい契約書を作って、マリエットに渡した。

「マリエット、頼むわね」

「はい」

「那々には先輩について除霊の勉強をしてもらうわ。マリエットと一緒に行きなさい」

「はい、分かりました！」

「本当に分かつてるのかしら……」

マリエットが先に外に出て、那々が遅れていると、

『早くしろ那々、このうすのろ！』

マリエットの頭の上でクーちゃんが言った。

「ご、ごめんなさい、今行きます！」

那々は小鳥に命令され、躓いて転びそうになりながら出て行った。

那々たちが現場につく頃には、辺りはかなり暗くなっていた。

「あれ、誰か家の前にいますよ」

那々たちが駆け寄ると、依頼主の男性が家の入り口の前で蹲って震えていた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、あなたは！？」

声をかけられ、依頼主はびくつきながら顔を上げる。するといきなり目の前に小鳥を頭の上に乗せた可愛い少女が現れるので、声を失った。さらに先ほど適当な除霊をした那々までいるので、依頼主は恐怖で声を震わせながら言った。

「ど、ど、どうなってるんですか！ 前よりも余計に酷くなっていますよ！」

依頼主をじっと見つめていたマリエットは言った。

「正常みたいです、よかったです」

「ちゃんと家があるのに、こんな所で夜を明かそうなんて、異常じゃないんですか？」

「悪霊に取り付かれていないっていう意味ですよ」

依頼主にはマリエットの言っている意味がよく分からないし、さらに那々がおかしな事を言うので、恐怖よりも苛々が勝って立ち上がった。

「君たち一体何しに来たんだ！」

「除霊です」

「き、君がやるのか？」

『当たり前だ！』

クーちゃんが言うと、依頼主は啞然としてしまった。頭の上にインコに乗せた少女はそれはもう可愛らしかったが、大ボケの那々よ

りも頼りなさそうに見えた。

「遅れてしまつて申し訳ありませんでした。すぐに済みますので」
マリエツトが頭を下げて言うと、クーちゃんがずり落ちそうになつて飛び上がる。

「大丈夫なんですか？ 家の中は本当にとんでもない事になつていますよ……」

「問題ありません」

マリエツトはクーちゃんと那々を連れて、真つ暗な家の玄関から入つていった。

家の中に入ると、明らかに温度が下がっていた。妙に湿っぽく冷えた空気が少女達を包み込む。マリエツトはすぐ近くにあるスイッチを入れるが、明かりは付かなかった。

「この家は電気代も払えないほど貧乏だったんですね」

「那々さん、違いますよ。悪霊が悪さをしているんです」

『上にいるぞ！』

「そう、上だね」

「クーちゃんは何で上とか言つてるの？」

マリエツトは頭上のクーちゃんを指差して言った。

「クーちゃんは、霊の居場所が正確に分かる霊能力インコなのです」

「霊レーダーインコ!？」

「それはちよつと言ひ辛いですけど、合ってます」

その時、二階の方からガラスの割れる音や、何か大きなものが落ちるような音が聞こえてきた。

「かなり禍々しい気を感じます。那々さん、さっきこの家で不審なものを見かけませんでしたか？」

「頭が二つある変質者がいました!」

「それは幽霊です」

「うゝん、幽霊と変質者の違いって、全然わかりませんよう」

那々は頭を抱えて本気で悩んでいた。

「…それは追々説明するとして、今は除霊が最優先です」

マリエットは腰につけているカードホルダーからタロットカードを一枚取り出すと、それを上に放った。

「アルカナフォース、サンのカードよ、聖なる輝きで闇を打ち払え」
マリエットの言葉と共に、中空のカードがオレンジ色の輝き発し、辺りを真昼のように照らし出した。やがて落ちてきたカードはマリエットの掌の上で浮遊し、直立した状態でゆっくり縦回転した。

「すごい！ マリーちゃんは手品が出来るんだね！」

「手品じゃなくて霊術だよ」

マリーが手を上げると、白熱灯のように温かみのある輝きが二階の階段の上まで照らし出す。

「悪霊は二階にいます。行きましょう」

第二話 タロットマスター 2

二人と一羽は二階へと歩を進めた。那々たちが二階に来た途端に、さつきから激しく鳴っていた物音が止んだ。二階には三つの部屋があり、一向は迷わず一番奥の部屋に向かう。

「変質者はここにいます！」

「那々さんが気配を感じられるものは、変質者じゃなくて幽霊だよ」
マリエットは那々が何度ボケても丁寧に教えた。

「じゃあ、開けるね」

マリエットがドアを開けると、はつきりと中で何かが動いた気配がした。サンの輝きが部屋を照らした時には、もうそれは消え去っていた。この部屋はコレクション置き場らしく、様々な調度品や彫り物などが床に落とされて、いくつかある瀬戸物も全部粉々に割れ、更に天上の蛍光灯も残らず割れてガラス片が床に散乱していた。

「うわあ、散らかっていますね」

「かなり強力な悪霊がいるみたいです」

「幽霊はどうやってこんなに散らかすんですか？」

那々が素っ頓狂な質問をしても、マリエットは静かに答える。

「それは、念力のような力を使うこともあれば、物理的に行う霊もいますよ」

「物理的って言うと、幽霊がちゃぶ台返しとかしちゃうんですね！想像するとシニールです！」

「確かにそうかも……」

クーちゃんがマリエットの頭から離れて、棚の上に置いてある大きな目の石の周りを飛んでしきりに囁き始めた。

「あれが元凶みたいですね。悪霊はここを中心として活動しています。ここに罫を張っておけば、捕えることが出来ます」

マリエットはカードを一枚出して床に置いた。

「更にもう一枚、これはデビルのカードです。このカードから発す

る暗い気配が悪霊を引き付けます」

「餌まであるんですね」

『餌じゃないよ……』

それからマリエットは六芒星の書いてあるカードを、二枚のタロットの周りに円形に配置した。

「これで準備完了です。サンの輝きがあると幽霊は近づけないので、罾にかかるまで廊下に出て待ちます」

「了解です！ 果報は寝て待てですね！」

「寝たら駄目ですよ」

マリエットは廊下に出ると、その場にぺたんと座り込んで小さな水筒を出した。

「悪霊が捕まるまでお茶でも飲みましょう。一つしかないので順番に回し飲みです」

「なんか幽霊退治って、ピクニックみたいで楽しいですね！」

「それはだいぶ間違ってます」

『アホー』

クーちゃんがカラスの真似をした。それから二人でお茶を飲んでみると、下から人が上ってくる気配がした。恐る恐る依頼主の男性が姿を現す。お茶を交互に飲んでいる那々とマリエットを見て、彼は啞然とした。

「……しばらく出てこないの？ 様子を見にきたら、貴方達は何をやっているんだ！」

「お茶を飲んでます」

「それは見ればわかりますよ！」

「果報は寝て待てですよ！」

「意味が分からない！？」

依頼主はマリエットと那々に立て続けに突っ込んで、肩で息をした。依頼主がさらに文句を並べようとしたとき、隣の部屋から大きな物音が聞こえてきた。何か大型の生き物が暴れているようだった。「捕まりました」

マリエットは言つて、目の前の部屋のドアを開けると、部屋は中央に現れている光の十字架によって煌々と照らされていた。更にその十字架には、幾重にも棘が巻きついていて、依頼主は状況が理解できずにいた。

「あれは何だ？」

マリエットは黙つて六芒星の描かれているカードを人差し指と中指の間に挟むと言つた。

「悪霊よ、その姿を現せ」

マリエットの手にあるカードの六芒星が輝く。すると、先ほど床に配置されたカードの六芒星も同じ様に輝いた。そして、円形に配置されたカードとカードの間が次々と光の線で結ばれ、あつという間に床に六芒星の円陣を描いた。

円陣の中心に立つ光の十字架に、逆さに吊るされた姿が現れる。その者の下半身は擦り切れたズボンを着て、上半身は裸、腕は四本有り、余分な二本は胸や背中など異様な場所から突き出ている。そして、首が分かれていて頭が二つ有り、片方はほぼ白骨化していて右目だけがぎよろつき、もう一方の頭は半分溶け落ちて下を突き出し、右目が飛び出して垂れ下がっていた。全身もところどころ腐り落ちていて、肋骨や内臓が露出している。光の十字架に逆さに吊るされて棘で縛られたその醜惡な怨霊は、それぞれの口から背筋の寒くなるような異様な声を上げながら、二つの頭を振り乱していた。

「ひいひいひいっ！！？」

怨霊を見た依頼主は、心臓が飛び出すくらいの悲鳴をあげ、走るくらいの早さで後退り、部屋の廊下に飛び出して壁に背中を打ち付けると、腰が碎けて座り込んだ。

「な、なな、なあ、なんだ、それはっ！！？」

「複合霊です。同じ様な怨念を持った幽霊同士が合体してしまったのです。二体分だから霊障が強かったんです」

「二対合体なんて、幽霊もやりますね！」

那々の発言を流して、マリエットは事も無げに言つた。

「言つのを忘れていましたけど、見ない方がいいですよ」

「見てから言わないでくれーっ！ー！」

「そんなに怖がることありませんよ。だって、目に見えなかっただけで、ずっとこの変質者、じゃなくて幽霊と一緒に生活していたんですから！」

「い、いやあー！ーっ！ー！！」

依頼主は那々の一言でショックのあまり気絶してしまった。

「……那々さんが変なフォロー入れるからですよ」

「あれー？」

「とにかく除霊です。この悪霊には、ジャッジメントのカードを使います」

マリエットは女の子の裁定者が描かれたカードをホルダーから取り出した。

「ジャッジメントは罪の重い者ほど重い罰を科します。つまり、強い怨念を持った霊ほどダメージを受けます」

クーちゃんが頭から離れると、マリエットは跳躍して、着地と同時にジャッジメントのカードを結界の上に重ねた。

「ジャッジメントの聖なる輝きが、悪霊を滅ぼします」

六芒星の円陣の中に筒状に白い光が満ちる。すると悪霊が二つの頭をのたうつて異様な苦悶の悲鳴をあげた。獣が低く吠えるような声と、妙に甲高い男の声が入り混じり、強烈な断末魔に打たれて周りの家具が小刻みに揺れ、那々は耳を塞いだ。

徐々に悪霊の姿が消えていくと、同時に叫び声もなくなって、辺りはしんと静まり返った。

「除霊、完了です」

「マリーちゃん、かつこいいー！」

その時、棚の上に積んであったダンボールの一つが落下した。それは見事に那々の頭に命中する。

「あつっ！？」

那々が倒れると、ダンボールが次々と落下して、埃が舞い上がっ

た。那々は頭にたんこぶを作り、何だかよく分からないガラクタが入った段ボール箱に埋もれていた。その情けない姿を見てマリエツトは静かに言った。

「占い、当たりましたね」

「うっ、靈験あらたかですね……」

先ほどのマリエツトの占いが、見事に的中したのだった。

依頼主が目を覚ました時、目の前で那々とマリエツトが覗き込んでいた。

「気が付きましたね」

「ああ！？ あの化け物は！？」

「ご安心下さい。既に除霊済みですよ」

「もういないのかい？」

「はい」

「しかし、なんだってあんな化け物が……」

「悪霊が現れた原因はこれです」

マリエツトは棚の上にあった河原の石を見せた。

「それは、川にいったときに拾ってきた石だよ。変わった形をしていたので、気になったんだ」

「これは積善供養の石積みが流れてきたものだと思われます。霊は意外とこういった物にも宿るので、むやみに変なものを拾ってきてはいけません」

マリエツトが石を裏返すと、依頼主はぎょつとした。そこには二つの人間らしき顔のようなものが浮かんでいた。石を拾ってきた時には、そんなものがあつた記憶はなかった。

「もう霊は宿っていませんけど、一応こちらで預かりますね」

「あ、ああ、お願いします」

「それで、今回の件についてですが、除霊を一度失敗していますので、三割引とさせて頂きます。それと、除霊が遅れたせいで物理的な損害と、依頼者様に精神的な苦痛を与えてしまったので、更に三

割引いたします。あわせて六割引になりますので、二十万円の請求書を送らせて頂きます」

「は、はい、分かりました」

「あと、無いとは思いますが、万が一また霊障が起った場合はご連絡下さい。すぐに対処いたします」

「それはどうも…」

マリエットは一気に用件を言うと、一礼して那々と一緒に家を出た。外はすっかり暗くなり、街灯の白い光が団地の路地を照らしていた。

「わたしもマリーちゃんみたいに、あんな技が使えるといいのにな」

「わたしのは洋式ですから、那々さんには向かないと思います。那々さんに適した霊術を探していくといいですよ」

「マリーちゃん、那々でいいよ。わたしたち友達なんだから、さん付けなんて変だよ」

「……本当に、わたしとお友達になってくれるんですか？」

「もう会ったときからお友達だよ。わたし、マリーちゃんの事が、とっても好きになったから」

那々が言うと、今までずっと無表情だったマリエットが、無垢な天使を思わせるような笑顔を浮かべた。

「ありがとう、那々」

この瞬間に、那々はマリエットにとって、たった一人心を通わせることの出来る親友となった。

タロットマスター・・・終わり

第三話 宇宙（そら）へ 1

那々が除霊体験をした次の日、夕方になると妖命社に学校を終えた少女たちが集まってきていた。

「六割とは思いつつた値引きをしたわね……」

「依頼主さんを気絶させてしまいましたので」

マリエツトが言っていると、杷月は苦々しい顔をしていた。それに向かって霞が口を開く。

「ごねられるよりはいいでしょ。器物破損もこっちの責任にされたっておかしくなかったんだし、お金もらえただけまだよ」

「そうね、この場合は冴えた判断だったわ」

「何かあったんですか？」

那々が聞くと、杷月の冷たい視線が注がれる。

「五十万もらえるはずだった報酬が二十万になってしまったのよ」

「三十万円も少ないじゃないですか！？」

「誰かさんが除霊失敗しちゃうから」

「誰ですか！？ 本当にしょうもない人ですね！」

「あなたでしよう！！」

「えええっ！？ わたし！？」

「何でそんなに驚くの！ まさか、除霊を失敗したという自覚すらなかったと言っの！？」

那々は助けを求めるようにマリエツトを見つめる。すると、頭の上のクーちゃんが喋った。

『那々のせいで三十万消えた！ あゝもったいない、三十万もったいない！』

「や、やめてーっ！ 金銭換算されるとすごく重いから！」

「那々を虐めちゃだめだよ、クーちゃん」

クーちゃんは頭を抱えている那々を見下ろして、何食わぬ顔で囁いていた。

「まあ、今回は那々を一人で行かせたわたしの責任だから、気にする必要はないわ」

「なーんだ、悪いのは杷月さんなんですね、心配して損しちゃいました」

「それは幾らなんでも開き直りすぎよ！ 少しは気にしなさい！」
「うう、さつきと言ってること違う……」

「バイト代を払う以上、甘くはないわ。さあ、仕事を始めるわよ！」
この日は霊退治の仕事は無かった。杷月は奥の部屋に引きこもり、マリエットはPCで報告書作り、霞は机の上に色々出して磨いていた。那々はやる事がないので、皆にお茶を淹れてお盆にのせると、見事に転んだ。それを見た霞は呆れ顔になる。

「あんた、なんというお約束を……」

「ふにやゝ、ごめんなさい」

「お茶はわたしが淹れますから、床の方をお願いします」

マリエットがお茶の用意をしている間、霞と那々は床を掃除する。霞が割れた湯飲みを拾いながら言った。

「まったく、余計な仕事増やすなよ」

「すみませんです……」

雑巾がけしていた那々は、ふと霞の机の上を見る。何だかよく分からない部品が沢山並んでいた。

「霞さん、何を作ろうとしてるんですか？」

「ああ、それね。見て分らない？」

霞は机の上にある銀色の筒状の部品を手にとって見せた。かなり大きく重厚なそれから、那々は何だか不吉なものを感じた。

「何か危なそうなものだという事だけは分かります……」

「別に危なくなんてないよ。ただのバズーカー砲だから」

「へゝ、バズーカー砲！？」

「大丈夫だって、対妖霊用だから、たいした威力はないんだ」

「びっくりしました。人に撃っても害はないんですね」

「いや、車一台くらいなら軽く吹っ飛ぶよ」

「危なすぎです!!」

「いくらわたしでも、こんなもの人に向かって撃ちやしないわよ」

「そういう問題ではないような気がします……」

「お茶が入りました」

マリエットがお茶を持ってくると霞が言った。

「那々、杞月さんにお茶をもっていつてあげなさいよ。今頃営業活動してると思うから、面白いものが見られるよ」

「部屋にこもりながら営業活動するんですか？」

「行ってみれば分かるよ」

那々がお茶を持って杞月の入った部屋に向かうと、霞が意地悪そうな笑みを浮かべる。

「那々の奴、驚いてまたお茶こぼすね」

「五樹さんは意地悪ですね」

那々はノックもせずに社長室のドアを開けた。

「杞月さん、お茶を持って……ああ!? でっかい犬がいる!!」

那々はお茶とお盆を放り出し、嬉々として社長室に駆け込んだ。

宙に投げ出された熱いお茶の入った湯飲みが、弧を描いて霞に向かって落ちてくる。

「やばい!!」

霞はオートマチックを素早く構えて、三連弾を発射する。それらは見事に空中の湯飲み命中して、お茶と陶器が飛び散った。

「ふ、自分でも怖くなるくらいの腕前ね」

「天井に穴が開きました」

「げっ!? 杞月さんには内緒ね!!」

「……」

霞とマリエットが話している一方で、那々は杞月の側に座っている大型犬くらいの生き物を見て大騒ぎしていた。

「杞月さん、犬なんて飼ってたんですね! 大きいですね!」

「あなた、お茶を持ってきたって言ってなかった?」

「あ、そうでした! …あれ? どっかいっちゃったみたいですよ!」

「どこにやったの!？」

那々は杞月の突っ込みを聞かずに、白い犬らしきものに近づいた。
「毛がフサフサしてて、三角の大きい耳がラブリーですね」

那々が犬らしき生き物の頭に手を伸ばす。

「不用意に触らない方がいいわよ!」

「ほえ?」

もう触っていた。犬っぽいものは頭をなでる那々の匂いをかいでいる。それが自分にしか慣れない事を知っていた杞月は、意外そうな顔をしていた。

「ああ!？ この犬、長い尻尾が三本もある!？」

「これが犬じゃないって事は、さすがに分かったかしら」

「すごい! 品種改良の技術も、ついにここまで来たんですね!」

「どんな品種改良よ!？ そもそも、尻尾が三本もある不気味な犬なんて、誰も買わないわよ!」

「珍獣マニアとかが買うのかと思いました」

「そんなコアな人だけの為に、品種改良なんてしない!」

「じゃあこの子は…」

「狐よ、見て分らないの? わたしが使役している妖狐なのよ。」

名前は白羅、^{はくわ}もう百年は生きているわ」

「なるほど、品種改良された、ようこって言う種類の狐なんですね!」

「違う!! いい加減に品種改良から離れなさい!」

そこにお茶を持って入ってきたマリエツトが言った。

「妖狐と言うのは、長生きして妖怪化した狐の事なんですよ」

「何だかよく分からないけど、すごい狐って事ですね」

丁寧なマリエツトの説明にもかかわらず、よく分からないと言った那々に、杞月は呆れるしかなかった。

「もうそれでいいわ…」

「白羅、お手っ!」

「するかっ! 妖狐は誇り高い妖怪なのよ!」

白羅はあっさりと、那々の手の上に前足を重ねた。

「なにぃーっ！！？」

驚愕のあまり立ち上がる杞月、部屋を覗いていた霞も、開いた口が塞がらなかった。那々はそれくらいの事をやってのけたのだ。

杞月は白羅の前に来てしゃがむと、その顔に刺さるような視線で見つめた。

「何やってるの？ あなたには妖狐としての埃はないの？」

白羅は、ぷいっと横を向いた。正に都合の悪い事から目を逸らした姿だった。

「すげえ、わたしもやる！」

部屋を覗いていた霞が入ってきて、白羅の前に手を出す。

「お手！」

「……」

「早くお手しろよ、この狐！」

白羅はおもむろに前足を上げると、それを霞の頭の上に置いてから踏み倒した。霞は狐に足蹴にされるという非常に情けない姿を晒す破目になった。

「普通はそうなるわよねえ」

杞月が言うと、霞が狐の足を押しのけて立ち上がる。

「こんちくしょう、納得いかない！」

「うわぁ、尻尾がもふもふで気持ちいいです」

那々は白羅の長い尻尾をマフラーの代わりにして遊び始める。霞は少しばかり羨ましそうな顔をしていた。それを見ていたマリエツトは言った。

「五樹さんも、もふもふしたいんですね」

「な、何言っちゃってんの！？ そんなわけないでしょ！ あんなの、羨ましくもなんともないんだから！」

『分かりやすい奴め』

「黙れインコ！」

杞月が再びパソコンの画面に向かう。液晶には地図が出ていて、

その中で無数の紅い点が動いていた。

「杷月さんは何を見ているんですか？」

「これは那由多町なゆたちょうの地図で、動いてる紅い点は放った飯綱いすながいる場所よ。このパソコンには付喪神つくもがみが憑いていて、霊獣の居場所を地図上で示してくれるの」

「いずな？」

「それは見せた方が早いわね。今一匹戻ってくるわ」

杷月が言っただけに、少し開いている窓から白い小型の動物が入ってきた。体は細長く、耳は狐のように三角で、長めの尻尾にはふさふさした毛がある。分かりやすく言うならば、おこじよと狐を足して二で割ったような動物である。

「可愛い！ 何ですかこの殺人的に愛らしい生き物は！」

那々はその生き物を胸に抱いて、頭をなでていた。

「それが飯綱。管狐くだきつねとも呼ばれる霊獣よ」

「タゲキツネ？」

「それじゃネット用語みたいでしょう！？ クダよ、ク・ダ・狐！」

「管状のものを住処とするから、別名で管狐と呼ばれるの」

那々はマリエットの言う事に頷く。そこは理解したようだった。

「管状のものと言うと、トイレトペーパーの芯とか！」

「そんなものに住まわせたら飯綱が可愛そうでしょ！！」

那々に抱かれている飯綱が呆れたかのように溜息をついていた。

「そう言えば、杷月さんはここで営業活動をしていると伺いました」

「今やっているのは下調べね。わたしは飯綱の見えるものを、霊視する事が出来るの。分かりやすく言うと、色んな場所に設置したカメラを次々と見ていくようなものね。飯綱がカメラの代わりになっっていると言う訳」

「すごい！ 飯綱って便利なんですね！」

「驚くところが微妙にずれてるよ。飯綱が便利なんじゃなくて、杷月さんがすごいんだ。普通の飯綱使いじゃこんな事は出来ないんだから」

と霞が言った。

「こうやって悪霊がついている人や場所を探してから営業をかけるのよ。霊商法って八割方詐欺だから、信用を得るのが難しいのよね。仕事を待っているだけでは、とてもやっていけないの」

それから柾月は淡々と仕事をこなした。

「…飯綱A子供に餌付けされ中、飯綱B野良犬と交戦中、飯綱Cお昼寝中……あなたたちちゃんと働きなさい!!」

独り言をずっと言っている柾月を、那々と霞は見守っていた。

「何か、すごく危ない人に見えます」

「眼鏡女だから余計にやばいよなあ」

「貴方たち、お黙り！」

十数匹の飯綱が那由多町を駆け巡る。飯綱は霊的な獣なので、普通の人間には見えない。彼らは何人か霊の取り付いた人間を見つけたが、取り立ててすぐに除霊が必要な程ではなかった。やがて一匹の飯綱が那由多医大病院へと入っていった。すると、柾月に強烈な妖気が伝わった。

「この病院、何かある。飯綱を総動員して徹底的に調査ね」

すぐに十数匹の飯綱が病院に集まり、あらゆる場所に入り込んでいく。すると、驚くべきことが明らかになっていった。

「どうなってるの、悪霊だらけじゃない……」

「そんなに沢山いるの？」

そう言う霞に、柾月は頷いてから言った。

「何かに引き寄せられているんだわ。何匹かの飯綱が元凶を見つけただけ、妖気が強すぎて中には入れない。地下の閉鎖された手術室ね」

「聞いただけでも何だかやばそうだね…」

「これはまずい。弱っている人が沢山いるから、早く除霊しないと取り返しの付かない事になるわ」

柾月は立ち上がりと言った。

「マリエットは引き続き内業をお願いね」

「はい」

「霞と那々は、わたしと一緒に来て、わたしが院長と話している間に、病院の中を調査してちょうだい」

「わかったよ」

「はい、了解です！」

那々が力強く拳手の敬礼をすると、杷月は思わず微笑した。

「良いお返事ね、那々」

三人は車に乗って那由多医大病院に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9981w/>

ファントム・プレイカーズ

2011年10月10日03時26分発行